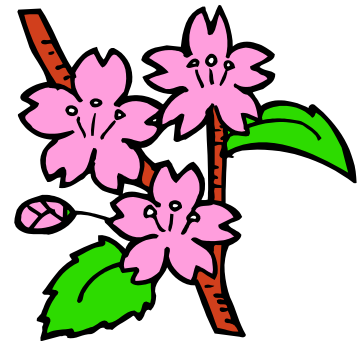


【良い国日本とは】

航空自衛隊のトップ田母神幕僚長が、「我が国が侵略国家だったというのはまさに濡れ衣である」という論文を発表して、解任させられました。「自分たちの国が良い国なのだと思わないで、防衛に命をかけられないではないか」と言うのでしょうか。

私たち夫婦はシンガポールで10年暮しました。シンガポールはマレー半島の南端にある淡路島ほどの小さな島国ですが、東南アジアの中心に位置します。イギリスの重要な植民地でした。

日本は東南アジア全体を占領支配する総司令部を置くために、1941年12月8日未明に、マレー半島北端に上陸し、半島を一気に南下して、2月15日にシンガポールを占領しました。



そして占領3日後に18才以上の中国人男子を皆集めて、反抗的な危険分子と疑われた市民を4万人虐殺して治安を確保しました。現在街の中心部に殉難者の記念塔が建てられ、2月15日に毎年慰霊祭が行われていますが、日本人の参列が許されたのは、戦後53年たってからでした。

私たちは戦後50年の年に赴任したのですが、その8月15日の新聞の第一面に大きな活字で、「アジアが日本から聞きたい言葉はは唯一つ謝罪するなのに、それがどうして言えないのか」とありました。そして青年の意識調査が発表されていました。

- | | |
|--------------------------|-------|
| 1. 日本はシンガポールに謝罪すべきだ | 78.3% |
| 2. 日本の占領を忘れてはならない | 80.7% |
| 3. 我々がうかつにしていると歴史は繰り返される | 80.7% |
| 4. 日本人は過去の汚点を思い出したがない | 78.3% |

丁度その日に日本では、村山総理大臣の談話（いわゆる村山談話）が発表されたのですが、シンガポールの新聞には反映されず、話題にならなかったのが大変残念でした。この談話は今読み返しても立派なものです。

「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して、多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。」

1999年2月26日、日本人中学校近くの地元の中学で、生徒14人が救急車で病院に運ばれ、4人が入院する騒ぎが起きました。日本軍占領時代の恐ろしさを体験する模擬演習中の事故だそうです。学校側が軍事教練団の16～18才の少年8人に日本兵を演じてもらったら、彼らがやりすぎて、殴ったり蹴ったり、女子の髪をつかんで引きずったりしたのだそうです。



私がショックを受けたのは、「他の中学では事故が起らなかったのに」とぼやいた校長の言葉でした。この中学校ばかりでなく、他校でも模擬演習が実施されていたのです。シンガポールでは小学4年生の社会科で「暗黒時代」という教科書を使い、日本占領時代の3年半を学びます。更に中学1年では歴史で学びます。そればかりでなくこのように体験的な歴史教育がなされていたのです。

日本から大学生が遊びに来ましたので、高校に一日入学させましたら、休み休み時間に生徒たちから日本軍占領時代のことをいろいろと聞かされたそうです。この国で日本人がそんなにひどいことをしたのかという驚きと、そのことを日本の学校で何一つ教わらなかったという恥ずかしさで、泣いてしまったそうです。

シンガポール建国の父リ・クワンユウ元首相がこう語っていました。「我々はイギリス人には頭の上がない、劣った人間だと思い込んでいた。ところが同じアジア人の小国日本が、あっという間にこの植民地支配者を追払ってしまった。待を大きく裏切ってしまったのでした。残念です。」

シンガポールの日本人小学校の道場で剣道の稽古をしていましたら、私のまわりにシンガポール人が集まってきて、高専や大学にも剣道部が生まれました。赤道直下の国で防具を付け、汗まみれで稽古する剣道にどうして惹かれるので

しょうか。

相手を見事に切り伏せていく剣法のかっこよさを映画で観て、惹かれた面もあるでしょうが、侍たちにみられる礼節を重んじ、信義に尊ぶ武士道の精神に、自分たちにはない心の特色をみて、剣道をやってみたいと思うようです。とても嬉しいことでした。

このようにシンガポールの若者たちは、日本軍占領時代という負の歴史をしつかりと教育されながら、それでも古い歴史を持ち、小さな島国なのに豊かな経済力をもってアジアをリードする日本への憧れを持っているのです。そして日本に学ぼうとしています。この心はおそらく他のアジア諸国でも同じでしょう。

私たち日本人は、アジアの人々は抱くこの心に触れ、良き友となり、手を取り合って平和で豊かな世界を作り上げていきたいものです。田母神さんも私と同じようにシンガポールに身を置いて、このようなシンガポールの現実に触れてもらいたかったと思われてなりません。